

---

# 見えない夕日

姉子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

見えない夕日

### 【Nコード】

N9311E

### 【作者名】

姉子

### 【あらすじ】

それは突然の出来事であった。突っ込んできたトラックは両親と私の目を奪い、そして私の人生さえも奪おうとしていた。そこで出会った若い医者とは、懐かしい人だった。

「見えますか？あの夕日が」

見えない、というより何も感じなかった。  
暗闇だ。

大阪から車で帰る途中、大型トラックが私の乗る車に突っ込んだ。  
た。

運転していたのは父、助手席にいたのは母。

即死だった。

「・・・見えません」

後部座席にいた私はなんとか一命を取り留めたが、私の目は死んだ  
も同然だった。

わずかに視力も戻るかもしれないと、ためしに包帯をのけられた結  
果がこれだ。

私の担当医は若い人のようだった。

名前は田久保という。私と同じくらいだろうか。

でもそんなことどうだっていい。

だって彼は見えるのだから。

「きっと見えるようになります。わずかですが可能性が」  
「気休めはやめてください」

最後の光景は最悪なものだった。

容赦なしに向かってくるトラック。

フロントガラスが真っ白になったと同時に、酷い痛みと熱であけられなくなった私の瞳。

耳には両親の叫び。

必死に探そうにも見えない私。

胸は強く押され、息もままならなかった。

小さく呼んでも帰ってこない声。

ただ手探りに母の手に触れ、父を探そうとしたが結局途切れた意識。

それが最後だった。

「気休めなのはわかっています、でも僕は医者です。どんな小さな可能性でも言葉にします」

「そうですね、たとえどんな嘘でもそれが患者のための優しいものなら許される」

私は絵が好きだった。

書くのも好きだった。

風にゆれる葉の一枚一枚が今では懐かしい。

羽を休め寄り添いあう鳥が今では愛しい。

すべてが輝いていた。

生きていた。

「嘘じゃない、とはい切りません。可能性としては5%にも満たないですから。でも可能性には変わりありません」

「私は」

懐かしい。

すべて懐かしい思い出となってしまった。

私は失ってしまったのだ。

無いに等しい可能性を残したまま、生き残ってしまったのだ。

「いつそ死にたかった」

ぽつりと言った言葉はすぐにどこかに溶けていった。  
でも私の穴の開いた心には、とても重く残った。  
穴をふさぐように、狂ってしまわぬように。

「僕はあなたに生きていてほしい」

彼は医者だ。

まず肯定などしないのはわかっている。  
でもそれがこんなにもわずらわしいなんて。  
寂しいなんて。

「これは一個人として言っている・・・早苗」

生きてくれ。

ふっと香ったのは懐かしいもの。

そう、私にはもう思い出しかない。

しかし探すまでもない。

彼は、田久保、田久保昭文だ。

見えないけれど、見える。

嗚咽とともにこめられる腕の力は、十数年も前とは強さが違っても、そつと頬、鼻、額、髪の毛、唇に触れるとどこも何も変わっていない。

ぬるい水が私の指をぬらす。

「昭文・・・医者になれたのね、おめでとう」

病弱だった母を見捨てることができずに、取りやめた駆け落ち。

それから彼は私から少しずつ離れていった。

18だった。

それ以前から将来を誓い合った仲だったが、小さな喫茶店の娘と次期院長の息子では不釣り合いもいいところだった。

それでも彼を愛し、私は愛されていたはずなのに。

「早苗すまない」

「昭文のせいなんかじゃない」

あの時無理やり駆け落ちするべきだったのか？

答えはNOだ。

駆け落ちしたところで、私たちはうまくはいかなかっただろう。身ごもった子どもは昭文には内緒でおろした。きつと幸せにはできなかっただろうから。

だったら何故、今こんなにも後悔しているのだろうか？

「子ども・・・いた・・・でも・・・」

「わかってる、ごめん」

ごめん、ごめん、と昭文が優しく髪を撫でる。私は声を抑え切れなかった。

本当はとても後悔した。

悲しかった。

やりきれなかった。

憎んだ。

産んであげたかった。

愛していた。

「早苗、俺がお前の目になる」

だから死ぬだなんてことだけはもう二度と言わないでくれと、昭文はまた抱きしめた。

「俺とお前の子に、会いたいんだ」

私も会いたい。

抱きしめたい。

たとえ見えなくても許されるなら、もう一度。  
でも。

「見たい・・・あの子を一目でも」

やっぱり見たいよ。

思い出なんかにしたくない。

思い出にすらならないなんてもっと悲しいよ。

私の、私たちのかわいい子。

「見えるようになる、きっと。5%なんて関係ない。今度こそ約束する」

幸せにする。

それは誓いのように、私の唇に彼の唇が重なった。

あの時果たされなかった約束と、守れなかった命、そして新たな目標。

私は見えない。

だけども見えない夕日は沈むことなく、私の穴の開いた心にぴったりとはまって輝きだした。

赤く燃えるように、それは何よりも力強く。

（後書き）

私、かなり視力やばいです。

失明しちゃうかもーなんて考えてたらこの話が浮かんできました。

實際目の見えない生活での苦しみや恐怖なんてものは考えもつきませんが、少しでも何か感じ取っていただけたら幸いです。

それではまた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9311e/>

---

見えない夕日

2011年1月23日14時25分発行